

Title	巻頭言 安全と安心
Author(s)	標, 宣男
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.23-No.2, 2013.12 : 1-1
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5035
Rights	

SERVE

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

安全と安心

東京に7年後のオリンピックの招致が決まり、久しぶりに明るい知らせを聞いたように思う。前回のオリンピックの時、私は大学生であった。高度成長時代の幕開けであったことを思い出す。7年後の日本の状態がどのようなものになっているか分からないが、この二つのオリンピックの間の世界の情勢の推移を見聞きし、これまでの日本の変化を体験してきたものとして、様々な思いが去来する。

この間に起こったことで私の専門領域に関連したことを述べると、研究生生活を始めてすぐのころ、アメリカのスリーマイル島の原子力発電所の事故が起こり、次にソ連のチェルノブイリ原発事故が発生しそして2年前に福島原発事故が起こった。特に福島の事故は、その原因が大震災とそれによって引き起された津波であったことは、地震国日本の事故原因として「やはり」という思いと、逆に地震や津波の研究では世界をリードする日本で「なぜ」と言う、相反する思いを持つ。それまで胸を張って？「日本の安全文化」を語ってきた日本の原子力関係者の多くが、その日本においてよもやこのような事故が起こるとは思っていなかったに相違ない。今、これについて、様々な反省がなされている。その中でなるほどと思わせた意見は、「欧米原子力先進国は……多くの基礎研究を積み重ねながら、時に失敗しながら、知識を蓄え、その集大成として原子力利用技術を獲得したのである。……日本は本音からでなく建前から入った。日本人特有の器用さで『ものづくり』としては世界一の製品をつくってきたかもしれないが、どこかまだ借り物技術のひ弱さが見られないだろうか。」という原子力関係の学者のものであった。さらにこの事故の調査を行った「東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証委員会」通称「政府事故調」の委員長であった 畑村 洋太郎氏の所感に、「理論的に起こり得るものは起こる」と考えなければならない旨の言葉がある。「借り物技術のひ弱さ」という言葉は、「理論的に起こり得るものは起こる」という考えを徹底できず、何か理論なるものを信用しきれない日本人の特性と通底しているのかもしれない。

しかし、日本に起こったこの事故の意味は、実は近代科学技術社会が共通に持っているものが、日本の特殊性において現れたということではないだろうか。このような現代社会を「リスク社会」という言葉で表した学者もあった。しかし、問題は「リスク」が科学技術に必然的に内在する以上、このリスクをゼロにして生きていくことは出来ないということである。畑村氏が、先の所感の中で「危険を完全に排除すべきと考えることは、可能性の低い危険の存在を無いことにする『安全神話』に繋がる危険がある。」と述べていることもこのことを言っているのであろう。また、同氏は「日本で安全・安心と一緒にいうけれども、簡単に言うな！安心なんて、あつてはいけない状態です」とある講演会で言い、心理学者中谷内一也氏も「安全と安心は本質的に相反する面がある」と言う。とすると結局、「安全は求めて良い。何も考えないでも良いというのが『安心』だとしたら、そんなのは、一番良くない。安心せずに、いつも心配して（心を配って）いるのが良いのです」という畑村氏の言葉が、現代を生きる者の心得となるのではなかろうか。